

## ドイツの戦争体験から

### 『1★9★3★7（イクミナ）を読む』

セバステイアン・マスロー

「おまえなら果たして殺さなかったのか」

この本を読みながら、私は逡巡していた。自分の国がいつか間違った方向に進み、その末に戦争をし、無辜の市民の命を奪うとき、私はその変化に気づくことができるのだろうか。そして体を張って、反対の声を上げて、それを阻止できるのだろうか。ナチズムの台頭とホロコーストをもたらしたドイツを母国にもつ私は、祖父母の戦争体験を想像すると常に不安になる。自分がこの時代に生きていたらどう行動したのだろうか。一〇代のときに学校でナチス・ドイツの歴史を学んで以来、自分に問い

続けてきた。私は一九八三年、旧東ドイツで生まれた。父母世代は自由と多くの命を奪った権威主義体制を経験し、その体制を長年に渡って（少なくとも受動的に）国民として支えていたのである。

政治学を専門に研究している私は、独裁国家に変貌した政治と社会のメカニズムを知ることによって国民を戦争に総動員させ、ナシヨナリズムを国家が煽る戦争の文化に抵抗するのはどれだけ難しいかを日々痛感している。とはいえ、遠い過去の戦争体験や権威主義の体験は、自分にとっては抽象的な記憶にしか過ぎなかった。だが、二〇二二年二月二四日、ロシアによるウクライナ侵攻はヨーロッパの戦争を再来させ、自分にとっての「戦後」

を終わらせてしまった。その後、ブチャの虐殺やイジュームの集団墓地などロシア兵による戦争犯罪の報道に触れ、抽象的な記憶であった虐殺は二一世紀の現実になった。

私の世代は欧州の戦争は過去のものであるかのように、国際法や人権の保障、欧州統合に力を注ぎ平和の土台を築き上げ、自由なドイツ、自由な欧州を享受した。シヨルツ首相がロシアによる戦争の勃発の直後の二月二十七日の議会演説のなかで語ったとおり、今明らかに「時代の変わり (Zeitenwende)」を経験した。それは、冷戦終結後の「平和の配当」が終わり、新しい戦争の時代に突入したという意味である。その文脈で考えるのは、自分がロシアの市民だったらどうするだろうか、ということである。戦争文化のうねりに流されるのだろうか。それとも、国家の弾圧を恐れずに抵抗するのだろうか。また、もし自分がウクライナ人であったならば、死を恐れずにロシアに対して戦う勇氣はあるのだろうか。現実の国際政治の動向は「人間の想像力の限界」に近づいている。

天皇の名の下でファシズム体制を築いた近代日本は帝國主義の道を通り、一九三七年に中国との戦争を引き起こし、同年二月南京の陥落の末、日本兵による市民に対する殺害、略奪、強姦を引き起こす。南京大虐殺とい

う戦争犯罪は現在、世界に記憶され、その残酷さは私たちにも衝撃を与え続けてきた。この残酷な出来事を出発点とした辺見庸は、『1★9★3★7』において、同時代を生きたら「おまえなら果たして殺さなかったのか」(辺見2016・上・三〇頁)と問う。辺見の父も中国に派兵されて残酷な戦争を体験したが、彼はなぜ軍の残酷な行為に反対しなかったのだろうか。なぜ「イクミナ」[戦争へ]という社会的・政治的な趨勢を止めることができなかったのだろうか。辺見の父に対するこの問いは、同時に自身に対する問いでもある。このように、辺見は父母世代の戦争体験と対峙しながら後に築かれた戦後日本の民主主義を問い直す。ここでは、一九四四年生まれの辺見が「戦後責任」を果たしているのである。このように辺見は『1★9★3★7』で父を尋問し、自分を尋問し、そして私たち読者を尋問する。

辺見は、その意義を次のように述べる。「世界は自己破壊しつつあるのか、それとも、転覆されつつあるのか——と問うならば、答えは明らかに前者である。『意味後世界』はおそらくすではじまっている。しかし、わたしはまだ崩壊し溶融する世界の全景をこの目でみたこととはない。戦争の全景をみたことがないように。にもか

かわらず、わたしは世界（もしくは戦争の全景）の一隅に、ただ在るともなくたたずみ、世界や戦争を既知かつ既視の風景のようにおもい、じんじょうとおもいなす（そうおもうことに狎れる）、よくない癖を身につけてもいる」（辺見2016・上：二〇頁）。すなわち、その目的は戦争が再び顕在化する現在こそ、過去の戦争の記憶を呼び戻し、人々を戦争に参加させるメカニズムとその根底にある精神を描くことなのである。

### 「未来は過去からやってくる」

上記の文章からは、辺見自身の現代に対する認識が読み取れる。我々は「世界は自己破壊しつつある」局面に立ち、「戦争の全景をみた」ものに、国家が直面する完全保障上の危機に対して戦争できる準備を突き進めている。こう思わせたのは「美しい国」と「戦後レジームからの脱却」を掲げた安倍政権である。安倍政権下においては、二〇一四年と二〇一五年に行った憲法解釈の変更による集団的自衛権行使の容認とそれに伴う「国の存立を全うし、国民を守るための切れ目のない安全保障法制の整備について」いわば「平和安全法制」の策定を行っ

た（辺見2016・下：二〇九頁）。この法律は平和国家である日本にとって大きな分岐点であったにもかかわらず、辺見は知識人やメディアは日本が直面する危機と不安について「あまりにもいじましく保守的である」（辺見2016・上：一〇頁）と指摘した。そして、辺見は「歴史はいま、あまりにも逆説的に展開」し「第三次世界大戦」にも進む戦後の七〇年間を一つの「戦間期」としてみる（辺見2021：三二頁以下）。

戦争や紛争の勃発、分断と民主主義の危機、大国間対立やナショナリズムの蔓延は現在の世界的現象であり、辺見はこのように評する。「世界中であいつくできごとはずでに人間の想像力の限界を遠く追いこしているにもかかわらず、である。わたしたちはできごとに置いてきぼりにされている。歴史はげんじつを飛びこしている」（辺見2016・上：一〇頁）。平和国家が岐路に立たされ、戦争の準備が着々と進められ、その社会的政治的風土の危機感を示しているのは『1★9★3★7』である。「未来は過去からやってくる……この逆説はこけおどしでもレトリックでもない。わたしたちは世界規模の戦争を現実化する諸条件を、げんざいだけでなく、過去にも探すべきなのであり、それはあらゆる兆候からして焦眉

の問題である」(辺見2016・上…一三頁以下)。それは、『戦争犯罪』『戦争責任』というがいねんと自覚そのものが希薄であった」(辺見2016・上…四五頁)戦後日本で戦争という言葉が(政治議論上)再度定着しつつある今こそ、南京大虐殺といった過去を知るべきだという意味である。なぜならば、辺見は「1937年に歴史は、そうとはあまり意識されずに、一気に飛んでいた」(辺見2016・上…一一頁)からだという。賑やかな社会でありながら、戦争の道に進む国に対して人々の沈黙は戦前と戦後の日本を結ぶ共通点であり、今なお国の方向性に対する「暗黙層」(辺見2016・上…三六頁)がある(Uchiyama 2019; 大塚2021)。戦争の道へ進む社会、そのメカニズムを知るうえで、今こそ一九三七年という年に立ち戻らなければならない。

## 記憶と忘却

戦争体験の記憶が曖昧なのはなぜだろうか。辺見によれば、「開戦責任」の意識の低さに対して「敗戦責任」への戦後日本における議論の主流化があるという(辺見2016・下…二二頁以下; OH 2001も参照)。こう

なったのも、戦後日本の民主主義の発展過程での国内外(米国占領の政策と冷戦時代における同盟関係構築の最優先化)の政治の結果である(山本2021)。すなわち、戦争体験を語るより戦後復興、過去の天皇ファシズムより戦後民主主義を優先することによって、「戦争犯罪」や「戦争責任」に対する戦後の「暗黙層」ができてしまった。そして、戦後日本の「平和憲法」および「平和主義」は言論上戦争体験に対するデフォルトとなり、平和国家である以上、戦争責任を追求することがなかったのである。

そもそも、記憶と歴史は区別されなければならない(Asmann 2016; 伊藤2022)。記憶は個人の体験に由来するものであり、トラウマとしてフラッシュバックしたり、時を経て感情とともに変化する現象でありながら、個々人の対話の中で、そして博物館や文学や映画などといった「記憶の場(sites of memory)」において物語として再構成する過程でもある(アルヴァックス1999: 一六頁以下; 渡邊2022; 高橋2017; Zehfuss 2007)。それに対して、歴史(学)は公開資料などを実証・解釈しながら記憶を正す過程である。個人の記憶は国家が目指す政治的な方針に応じて動員され、

のちに集団的記憶として現れる。「歴史修正主義」が広がりを見せた一九八〇年代後半、フランスの歴史家ピエール・ヴィダル・ナケが『記憶の暗殺者たち』（一九八五年）を公表し、記憶と歴史の間には緊張や対立が常に存在するということを明らかにした。たしかに、辺見が言うように、「無意識的にせよ意識的にせよ、記憶と忘却は、憶えるべきものと忘れるべきものとに政治的に選択され、そうするようになるものかにながされている」（辺見2016・上・四二頁）。ドイツでも、社会的分断

が生んだ右翼政党である「ドイツのための選択肢（AfD）」は以前から地方政治で躍進して、二〇一七年以降連邦議会においても有力野党となった。AfDはホロコーストの歴史を相対化することによって反ユダヤ主義や移民に対する排他主義的発言を繰り返して、戦争責任、とりわけ記憶を塗り替える「歴史修正主義」を主張する（武井2021を参照）。それがもたらすのは「二七の記憶」（辺見2016・上・五七頁）の蔓延である。

記憶、歴史、忘却の間の対立や緊張関係は今の日本にも見られ、近年の安倍政権はその一つの表れであろう。

二〇一五年の安倍首相（当時）の「七〇年談話」（首相官邸2015）では、開戦責任よりも戦後平和における

日本の貢献を強調しながら、戦後生まれの世代には「謝罪を続ける宿命を背負わせてはな（らない）」と言い、「世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わなければなりません。謙虚な気持ちで、過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任がある」という点には言及したものの、五年後の二〇二〇年の全国戦没者追悼式で安倍が述べた式辞には「歴史」という二文字もなく、戦争に関する日本の加害責任に関する言葉もなかった（首相官邸2020）。

たしかに、記憶は社会的コンセンサスである。少子高齢化が進む中で戦争体験をもつ人々が年々減るのは事実であり、歴史に関する認識や関心が社会においてシフトするのは自明である。その意味において、安倍らの歴史観はシフトする社会的コンセンサスの産物である。しかし、教育基本法の改正等の教育内容の変更を進めた安倍政権は、歴史に関するコンセンサスを作る主体でもある。すなわち、少なくとも民主主義体制においては、国民（有権者）の支持なくして歴史の修正を訴える政権は成り立たないのである。記憶と政治は常に緊密な関係にある。

戦後の平和主義といった社会的・政治的デフォルトの

結果、「戦争犯罪』『戦争責任』というがいねんと自覚そのものが希薄であった」(辺見2016・上:四五頁) ことに加えて、一九五〇年代以降、とりわけ高度経済成長を経験する日本には「もはや戦後ではない」という認識が定着し、戦争体験の自覚が希薄になったのである(吉田2005・辺見2007を参照)。では、ドイツの場合はどうだろうか。

### 「記憶の墓があばれなければならない」

戦争体験を「正しく」記憶する模範とされてきたドイツの「想起の文化 (Erinnerungskultur)」(Assmann 2016)は、ここ数年においてシフトしているようである。つまり、戦争体験の記憶が曖昧だったのは日本特有の現象ではないのである(栗屋等1994)。そもそも、一九四〇年代後半から一九六〇年代末までドイツにおいても、社会の誤った動向に沈黙する「暗黙層」も多く存在した(Berger 2012; Frei 2012)。この「暗黙層」を大きく揺るがしたのは一九六三年から一九六五年の間に行われたアウシュヴィッツ裁判であり、そして一九六〇年代末に起こった学生運動である。戦後の沈黙に対する不満

は学生運動の大きな原動力となり、戦後(西)ドイツのあり方を問うこの運動はようやく父母世代に対する問いを社会と文化に定着させた。一九八〇年代後半はドイツの「想起の文化」にとって次なる分岐点となる。終戦四〇周年を記念した一九八五年五月八日の連邦議会で、ヴァイツゼッカー大統領(当時)は「過去に目を閉ざす者は、結局現在にも盲目となる」という有名なスピーチを行い、さらに「罪の有無、老幼いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。全員が過去からの帰結に関り合っており、過去に対する責任を負わされているのであります」(永井訳1991)と強調したように、戦争の記憶は戦後ドイツの国家そのものの核心に存在すべきである。その後、歴史学者のエルンスト・ノルテ(Ernst Nolte)や哲学者のユルゲン・ハーバーマス(Jürgen Habermas)などの歴史家論争(Historikerstreit)が起こったが、その核心は、ドイツはナチズム、とりわけホロコーストの歴史とどう向かい合うべきかという点であった(Moses 2007)。結果として、戦後ドイツのアイデンティティにおいてホロコーストの唯一性(Singularität)が強調されることにより、ドイツの戦争責任と戦後責任に対する認識がさらに国民に定着

した。一九九〇年代、安全保障上の新たな役割を国際的に求められ、自ら模索したドイツのコール（当時）首相は、一九九五年六月、議会で第二次世界大戦における避難・追放の歴史を追悼する演説のなかで「過去を知らない者は、現在を理解できず、未来を創出できない」と発言し、このように戦争体験の記憶に関する社会的コンセンサスを示した。

このように定着した「想起の文化」の一つの結果として、『1★9★3★7』と同様に、近年のドイツでは父母世代の戦争責任および戦争体験を問う書籍が出版され注目を集めている。ここでは三冊を紹介するが、なぜ今、ドイツではこのような文学が注目されているのだろうか。中でも著名な文学者であるアライダ・アスマンは二〇一六年の書籍のなかでドイツの「想起の文化」の多様化、とりわけ歴史修正主義やナショナリズムの勢力による記憶への新たな挑戦という現象に注目する。アスマンは戦後世代がドイツの加害者責任から被害者意識にシフトしつつある傾向を指摘し、その事例の一つとして二〇一三年に第二ドイツテレビ（ZDF）が三回に渡って放送した「ジェネレーション・ウォー（Unser Mütter, Unsere Väter）」という大ヒット作品に着目する。この

ドラマは家族における「暗黙層」に焦点を当て、父母世代の戦争体験を語る。だが、このように戦争を家族の記憶として扱う「ジェネレーション・ウォー」は、被害者責任と加害者責任の棲み分けを曖昧なものとし、現代ドイツにおける「想起の文化」の多様化と曖昧化の傾向を例示するものとなったのである。

この「想起の文化」の曖昧化は、世論調査からも読みとることができる。ビレフェルト大学が二〇一七年一月から二〇一八年二月の期間に実施した一六歳から九二歳の男女を対象とした調査（B=100）によれば、一七・六％が親戚が第二次世界大戦に犯罪を起こしたと回答したものの、五四・四％は自分の身内は戦争の被害者であったと答えた（Frankfurter Allgemeine Zeitung 2018）。このように「過去の克服」のモデルとされているドイツにおいても、実は戦争をめぐる責任論は曖昧であり、このような認識は一九九〇年代に顕在化している。そのきっかけとなったのは一九九五年から一九九九年、そして二〇〇一年から二〇〇四年まで開催されたドイツ国防軍展（Wehrmachtausstellung）に対する反発である。この頃から、ドイツ国防軍の一般兵士であった父は戦争犯罪はしていないという認識が広く共有され始め



ていたのである。

このようなドイツの「想起の文化」が変化する上で重要な「記憶の場」は、父母世代の戦争体験を問う文学ともなっている (Zehfuss 2007)。ここで、近年に出版された三冊を取り上げたい。まずは、ラルフ・ロートマン (Ralf Rothmann) の二〇一五年に発表された『Im Frühling sterben (春に死す)』である。この小説の中で、一九五三年生まれのロートマンは親友同士であった一七歳の二人が戦争末期の一九四五年二月に武装親衛隊に徴兵された物語を描く。武装親衛隊から逃げようとした一人の主人公が捕えられ、死刑判決を受ける。そして、死刑を実施するのはもう一人の親友である。つまり、戦争で撃った唯一の弾がもたらしたのが、親友の死だった。ロートマンは父世代の罪に一方的に迫るのではなく、兵士だった父の精神状態とトラウマにフォーカスする。この作品は父親世代の戦争体験における精神的な被害に注目し、いわゆる「息子世代文学 (Sohnesliteratur)」の起点となったのである。次は、一九四四年生まれ、戦後、東ドイツで育ったクリストフ・ハイン (Christoph Hein) の『Glückskind mit Vater (父と共にいる息子の肖像)』である。辺見と同年生まれのハインのこの小

説は、『1★9★3★7』とほぼ同時期に出版され、これは実話に基づくものである。物語の主人公は、ある日自分がナチス戦犯の息子であることを知り、その事実がその後の彼の人生を破滅させてしまうこととなる。多くの家族が共有するナチズムの歴史に注目することによって、ハインの小説は戦後ドイツの集団的トラウマに関心を寄せているのである。最後に、ヨーゼフ・ヴィンクラール (Josef Winkler) による二〇一八年出版の『Laß dich heimgehen, Vater, oder den Tod ins Herz mit schreiben (父が責任を認めねば私の心は死を刻む)』がある。一九五三年生まれでオーストリア出身のヴィンクラールが描いたのは、多数のユダヤ人等を殺害したナチス親衛隊のメンバーが戦後自殺し、その遺体をヴィンクラールの故郷の村人たちが埋葬したという実話である。なぜ故郷の人々は戦犯を埋葬したのか、なぜその事実を知った父はそれを告白しなかったのか。ヴィンクラールはこの小説で父に問う。

戦後日本の行方を追う辺見は、現代社会はどこに行くかを知るために、我々は「記憶の墓があばれなければならない」(辺見2016・上:二五頁以下)と書いた。上述した小説は、「ジェネレーション・ウォー」にも見



られるように、国家による戦争記憶から個人や家族の戦争体験にフォーカスをシフトさせ、「記憶の墓」があげられて戦後世代が共有できる記憶とトラウマに注目する共通点をもつ。それらに注目することによって、戦後ドイツおよびオーストリア社会のあり方と行方を問うているのである。

### 「未来は不安にみちている」

侵略戦争を行った過去と記憶をもつ日本とドイツが世界で積極的な軍事的役割を果たすべきか否かは、冷戦後、とりわけ現在大きな論点となっている。「戦争」が再び焦点となった今、二〇一九年の『文藝春秋』のある記事において、日本の戦争体験について直接話を聞いたことがあると答えた大学生は四一％で、今後三〇年間に日本は戦争に参加するかという質問に「しない」と答えた人は七七％であった（文春オンライン編集部2019）。岸田政権は二〇二二年一月に新しい安全保障戦略を打ち出し、戦後日本の防衛体制の見直しを行った。北朝鮮の相次ぐミサイル発射、中台の緊迫状態、そしてロシアによるウクライナ侵攻を理由に防衛予算を大幅に増額し、

「敵基地攻撃能力」ないし「反撃能力」の保有を決定した。そしてここ数年、「地政学」ブームが起り、権力政治や戦争といったレトリックが日常化し、毎日新聞が連載しているようにメディアはもはや平和国家の行方を追うようにさえなった。

ドイツは一九九〇年代から徐々に安全保障体制を見直し、北大西洋条約機構（NATO）や国際連合（UN）の下での活動に参加した。そして、バルカンやアフガニスタンなどの地域や国に軍を派兵し、紛争や戦争を経験している。さらに二〇二二年、ロシアによるウクライナの侵略を機にドイツは安全保障政策を見直し、「時代の変わり」に直面するヨーロッパの平和を守るために大幅な軍事力強化に舵を切ったのである。一九六〇年代末以降、ソ連や東欧と外交関係の改善に乗り出した（西）ドイツは、冷戦終結後も「貿易で変易（Wandel durch Handel）」の冷戦時代の外交を部分的に維持し、特にエネルギー輸入を視野に入れてロシアとの緊密な経済関係を築いた。二〇世紀前半、欧州の平和を破壊したドイツは、ロシアと戦うウクライナへの兵器供与には慎重な姿勢を示した。ヨーロッパの安全保障をめぐって模索するドイツは、過去の戦争記憶にとらわれ過ぎているのでは

ないかと国内外で批判を浴び続けている（例えば、 Snyder 2022）。自ら侵略戦争を起し、ヨーロッパの平和を破壊したドイツは、このような戦争体験があるからこそ、今や積極的に平和を守る責任があるというように議論が大きくシフトしたのである。

日本とドイツの両国は軍事的対立を煽るスパイラルに乗って、平和を取り戻すためには戦争の準備しかないというやや単純な論理によって戦争を新しいデフォルトとしてしまった。この現象は、『1★9★3★7』の「イクミナ」が指摘していることをまさに象徴しているのではないだろうか。「イクミナ」は渦巻きのように人々を戦争に駆り立てて戦争を一種の文化として作り上げ、そこからの脱出は極めて難しいことを指摘する。辺見が言う通り、「未来は不安にみちている」、そして「歴史はげんじつを飛びこしている」。さあ、戦争になったら「おまえなら」どうする？

附記 本稿の執筆にあたり、科研費22K01152の助成を受けた。

謝辞 二〇二二年二月二七おける加害の記憶「シンポジウム」の討議者の方々、報告者の方々、とりわけ討論の機会を

与えて下さいました岡本和子先生、谷口垂沙子先生、竹内栄美子先生、根本美作子先生に御礼申し上げます。

## 注

- (1) 邦訳が出版されていないため、左記の小説三作のタイトルは邦訳は筆者による。
- (2) 『平和国家』は「こへ」連載は二〇二三年一月から掲載されている (<https://mainichi.jp/security/heiwadokoko/>、二〇二三年一月二〇日閲覧)。

## 参考文献

- モリス・アルヴァックス著・小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、一九九九年。
- 粟屋憲太郎・広渡清吾・三島憲一・望田幸男・山口定「戦争責任・戦後責任——日本とドイツはどう違うか」朝日選書、一九九四年。
- 伊藤純子「フランスにおける『記憶の法律』の現在」『憲法理論叢書』三〇号、一六一—一七五頁、二〇二二年。
- 大塚英志『暮らしのファシズム——戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた』筑摩選書、二〇二二年。
- 首相官邸「内閣総理大臣談話」二〇一五年八月一日、[https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10992693/www.kantei.go.jp/jp/97\\_abe/discourse/20150814danwa.html](https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10992693/www.kantei.go.jp/jp/97_abe/discourse/20150814danwa.html)

(二〇一三年一月二〇日閲覧)

- 首相官邸「令和二年度全国戦没者追悼式総理大臣式辞」二〇二〇年八月一日、[https://www.kantei.go.jp/jp/98\\_abe/statement/2020/0815siki.html](https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/statement/2020/0815siki.html) (二〇一三年一月二〇日閲覧)
- 高橋秀寿『ホロコーストと戦後ドイツ——表象・物語・主体』岩波書店、二〇一七年。
- 武井彩佳『歴史修正主義——ヒトラー賛美、ホロコースト否定論から法規制まで』中公新書、二〇二一年。
- 永井清彦『ヴァイツゼッカー演説の精神——過去を心に刻む』岩波書店、一九九一年。
- P・ヴィタル＝ナケ著・石田靖夫訳『記憶の暗殺者たち』人文書院、一九九五年。
- 文春オンライン編集部「令和の大学生100人アンケート 戦争体験を直接聞いた「41%」、日本の戦争可能性」23%」『文春オンライン』二〇一九年八月一四日、<https://bunshun.jp/articles/-/13414> (二〇一三年一月一一日閲覧)。
- 辺見庸『記憶と沈黙』毎日新聞社、二〇〇七年。
- 辺見庸『完全版 1★9★3★7 (上)』角川文庫、二〇一六年。
- 辺見庸『完全版 1★9★3★7 (下)』角川文庫、二〇一六年。
- 辺見庸『コロナ時代のパンセー——戦争法からパンデミックまでの7年間の思考』毎日新聞社、二〇二一年。
- 山本昭宏『戦後民主主義——現代日本を創った思想と文化』

中公新書、二〇二一年。

- 吉田裕『日本人の戦争観——戦後史のなかの変容』岩波書店、二〇〇五年。
- 渡辺純『戦後の物語』の政治学——日本人は何を守ろうとしてきたのか』風行社、二〇二二年。
- Assmann, Aleida. 2016. *Das neue Unbehagen an der Erinnerungskultur: Eine Intervention*. München: C. H. Beck (ライオン・アスマン著、安川春基訳『想起の文化——忘却から対話へ』岩波書店、二〇一九年)。
- Berger, Thomas U. 2012. *War, Guilt, and World Politics after World War II*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frankfurter Allgemeine Zeitung. 2018. „Deutsche fühlen besondere moralische Verantwortung — aber keine Schuld.“ 二〇一八年二月十三日付 <https://www.faz.net/aktuell/politik/inland/deutsche-fuehlen-verantwortung-aber-keine-schuld-15446803.html> (二〇一三年一月八日閲覧)。
- Frei, Norbert. 2012. *Vergangenheitspolitik: Die Anfänge der Bundesrepublik und die NS-Vergangenheit*. München: C. H. Beck.
- Hein, Christoph. 2016. *Glückskind mit Vater*. Berlin: Suhrkamp.
- Moses, A. Dirk. 2007. *German Intellectuals and the Nazi Past*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Orr, James J. 2001. *The Victim as Hero. Ideologies of Peace*

- and National Identity in Postwar Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Rothmann, Ralf. 2015. *Im Frühling sterben*. Berlin: Suhrkamp.
- Snyder, Timothy. 2022. "Germans have been involved in the war, chiefly on the wrong side." *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 11 October 2022, 6月17日, [https://www.faz.net/aktuell/politik/ausland/juergen-habermas-and-ukraine-germans-have-been-involved-in-the-war-18131718.html?printPage&Article=true#pageIndex\\_2](https://www.faz.net/aktuell/politik/ausland/juergen-habermas-and-ukraine-germans-have-been-involved-in-the-war-18131718.html?printPage&Article=true#pageIndex_2) (10月17日閲覧).
- Uchiyama, Benjamin. 2019. *Japan's Carnival War: Mass Culture on the Home Front, 1937–1945*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Winkler, Josef. 2018. *Lass dich heimgenügen, Vater, oder Den Tod ins Herz mir schreibe*. Berlin: Suhrkamp.
- Zelkoff, Maja. 2007. *Wounds of Memory: The Politics of War in Germany*. Cambridge: Cambridge University Press.